季刊

四季

春季号

一九八四年四月一日発行

四季社

田中克己著「中国の自然と民俗（2,800）」

「古稀の機会に御高著を刊行，Ⅰが年中行事，Ⅱが諺，Ⅲが植物，付録が家伝と，体系的，記念的で，また文章が上手なので感心しています（後略）」（皇学駿大学教授西宮一民先生）

田中克己著「蘇東坡（2,000）」

「非常に面白く楽しい本です。夜を徹して読了しました。」（福岡市　定松康二氏　31歳）。「先生御自身の体験を回顧しつつ　東坡居士に肉薄して文豪の面目を躍如たらしめていらっしゃる所は流石と感じ入って居ります。（後略）」（芦屋市　城戸元彦先生）

松浦友久著
詩語の諸相
── 唐詩ノート　（3,600円）

増井経夫著
中国の二つの悲劇
── アヘン戦争と太平天国　（1,500円）

植木久行著
唐詩の風土
（2,200円）

小倉芳彦著
逆流と順流
── わたしの中国文化論　（1,800円）

野原四郎著
歴史への視点
（3,500円）

五井直弘著
中国古代の城
── 中国に古代城址を訪ねて
（1,900円）

野原四郎著
中国革命と大日本帝国
（1,800円）

（送料は出版社負担とする。）

研文出版
（山本書店出版部）
〒101 東京都千代田区神田神保町2−7
電話　東京（261）9337
振替　東京／0−59950

目　次

ナポリのポルノ …… 植村　清二　2
スズムシ …… 小杉　茂樹　5
海　棠 …… 堀　多恵子　6
三つの「君が代」のこと …… 山住　正己　8
書斎慢談（2） …… 矢野　峰人　10
詩経「我徂東山」訳註 …… 松枝　茂夫　12
『砂の砦』の「沖の島」の推敲 …… 金井寅之助　14
エチュード …… 小高根太郎　15
痴人と医師と …… 浅野　晃　16
ＡＲＳの証明 …… 藤澤　桓夫　18
真　実 …… 野上　吉郎　20
挽　歌 …… 福地　邦樹　21
爽やかな朝 …… 石山　直一　22
今は昔の田植風景 …… 牛尾三千夫　24
「花八つ手」抄 …… 原田江南子　26
シュプール …… 川村　欽吾　28
光　り …… 江頭　彦造　30
嫖緻よしの朝 …… 伊達　温　32
ブルーミントンのさくら …… たかはししげおみ　34
伊吹山 …… 岩崎　昭弥　36
春の樹木（ツワイク） …… 秦　海人　40
松 …… 加藤　和子　42
く　も …… 花井タツ子　43
或る季節 …… 宇田　良子　44
春　昼 …… 藤野　一雄　45
祈　り …… 坂口　允男　46
ジブラルタル夜航 …… 石浜　恒夫　47
わたしの言葉 …… 田中　克己　48
同人規定 …… 49
同人名簿 …… 50

ナポリのポルノ

植村清二

二度目にローマへ行った折に、少し時間に余裕があったために、ナポリまで足を延ばした。例の「太陽の道路」を、真直に東南にモンテ・カルノは左に伏し拝み、カプアは素通りにして、昼過ぎにポンペイに着く。文字通りグリンプスではあるが、「ヴエイイの家」の庭園と、ペニスの指標のある女郎屋も一見した。この種の施設は、古今を問わず、東西を論ぜず、あまり変らないように思うがどんなものか。

ナポリに入ると、かなり広い街路を、西側の三階・四階の窓から、交互に張り渡した綱に、さまざまの洗濯物が、満鑑飾で飜っている。むかしから聞き及んでいる名物だが、実際に見てまた感心する。

公園のわきの海岸の石畳に、三百トンほどの客船を繋いで、そのままレストランにしてある。関西の牡蛎舟を大きくしたようなものである。遅い昼食にと乗り込む。食卓に着いて、ナポリ名物のブイヤベースを命ずる。ところが生憎不漁(しけ)で、碌な魚がない。給仕が持って来たのを見ると、殆ど烏賊ばかりである。烏賊なら佐渡沖のを食い飽きている。ナポリくんだりまでわざわざ食いに来ないと言いたいところだが、文句を付けようにも、イタリア語は出来ない。黙って汁を啜ることにする。生憎といえば空も曇っていて、ティレニアの海も青くない。むかし「即興詩人」を愛読して以来憧れている琅玕洞も、天候と時間の関係で、行けそうにない。少し憂鬱である。

烏賊汁も残り少なくなった頃、レジにいた中年の小男が手招きをする。勘定にはまだ少し早いが、何事かと思って立ち上ってその傍へ行くと、物蔭から薄っぺらいカラー写真のパンフレットを出して、そっと開いて見せる。読めた。ポルノグラフである。男は二冊見せる。どちらも二十頁足らず、御存じコペンハーゲン製である。

一冊はややアクロバティックだが、格別のことはない。もう一冊はちょっと驚いた。対手は大きいシエフアードである。

僕はポルノに特別な趣味はない。しかしこのところ十年ばかり世話になっている主治医がポルノ好きである。文字と絵画とを問わない。しばらく乞われて、診察の度毎に「末摘花」を抜萃して講義したことがある。イタリア土産には、カメオやヴェニスの硝子細工よりも、ポルノの方を喜ぶかも知れない。僕は顎をしゃくった。値段は二千リラくらいである。そのくらいなら小銭の持ち合せがある。僕はポルノ二冊をグルグル巻きにしてポケットにねじ込んだ。

羽田の税関は事なく通った。その前にイスタンブールで手に入れたトルコの古剣では、大分苦労したが、今度はそんな苦労は無用であった。数日後ポルノは主治医のもとに届けられた。主治医は地区の医師会で披露して、大いに面目を施したという。めでたし、めでたし。

スズムシ

小杉茂樹

生き残ったスズムシが
一つの歌ばかりを
なぞっている

秋の夜明けちかく
疾走してくる牛乳配達車の
うしろの方で
また鳴いた
こんな寒い払暁
因果なことだ

海棠

堀　多恵子

この三、四年漢詩をよく読んだ。高校の教科書から読み始めたという程度の勉強である。そんな折、辰雄が残したノオト類の中に、いくつかの漢詩詞を墨書したものがあったのを思い出した。取り出して見ると李清照の詩詞である。私はそれを自分の言葉に置き替えてみたくなった。

如夢令

作夜雨疎風驟、濃睡不消残酒。試問捲簾人、却道海棠依舊。知否。知否。
應是緑肥紅瘦。

昨夜の雨はまばらであったが、風は時々強く吹いていた。私はよく眠ってしまったが、お酒のなごりはまだ消えていない。簾を捲き上げている人に外の様子を聞いてみると、意外にも海棠はもとのままですという答えであった。知っているのだろうか。知っているのだろうか。たしかに葉の緑は深くなり、花の紅は褪せてしまっているはずなのに。

（李清照は宋代の女流詩人で、易安と号した。中華書局発行の李清照集には美しい像が載っている。）

三つの「君が代」のこと

山住正己

「君が代は千代に八千代に……」の歌詞には、三つの曲がついている。一つは、いま相撲の千秋楽結びの一番の後、全員のうたう雅楽調の歌で、日本のおとなはたいてい知っている。この歌を小・中学校の卒業式でうたうべきかどうかが、たびたび問題となる。

二つめは音楽取調掛編『小学唱歌集』初編（一八八二年）にのっていた歌で、「こけのむすまで」の後に「常磐かきはに、かぎりもあらじ」とつづき、二番もついている。三つめは、一八六九年、イギリスの軍楽隊隊長フェントンが作曲したものである。

フェントン作曲の「君が代」はうたいにくいというので海軍軍楽隊から宮内省式部寮雅楽課に、宮中で奏せられる正楽つまり雅楽によって作り直してほしいとの要望が出された。雅楽師たちは一八八〇年に作曲、その年の十一月三日（明治天皇誕生日、天長節）に初演。ただし国歌ではなく、軍が天皇礼式曲として使用するにとどまり、『小学唱歌集』では別の歌が採用され、さらに同じ一八八二年には文部省が音楽取調掛に対し国歌選定を命じている。しかし取調掛は一年間努力したものの、国歌は文部省の指示によって作るべきものではないとの考えに到達して、この作業を停止した。

教育勅語発布（一八九〇年）後、祝祭日に学校で儀式が行なわれるようになり、その席で祝祭日の歌（たとえば「紀念節」「天長節」など）とともに「君が代」がうたわれるようになったが、国歌として正式に決定されたのではなかった。この歌が国歌とされるようになったのは、日清・日露戦争のころから、学校とくに義務教育の小学校においてであった。そして修身教科書には、この歌は天皇の治世がいつまでもつづくように祈る歌だと書かれるようになった。いま、この歌はふたたび学校を通じて国歌であると教えられようとしているのである。「君が代」の歴史をふり返りその適否を日本人一人一人が考え判断する必要があると思う。

書斎慢談（2）

矢野峰人

僕が日本で見た書斎で忘れ難い印象を与えられたのは、これは日本人ではなく英国人なのだが、先般亡くなられた、もと京大英文学の教師だったエドワード・クラーク先生の書斎である。これは、先日も同先生に関する追憶記の中にちょっと記しておいたが、とにかく立派な、いかにも学者の書斎らしいものであった。その頃先生はまだ三高の教師をしておられたのだが、洛東真如堂裏の和洋折衷の家に住んでおられた。先生の書斎というのは、およそ二十畳敷の洋室だったが、左右の壁ぎわには、殆ど天井に届くかと思われるまでに積み重ねられた硝子戸の組合せ本箱が一斉に無数に立ちならび、それが悉く二重の列を成せる大小の美本を収めており、室の中央に、応接用と言おうか書物置きと言おうか、ちょっとした卓子を置き、突き当りの奥の方、窓に近い所に仕事机を備えつけてある以外には、大小の本箱書棚があらゆ

る場所を占領していた。先生は、日本にはじめてラグビイを輸入したというほどのスポーツマンではあったが、僕の識ったころ――大正二年秋――には、既に一方の耳が聾い、一方の脚がまたリュウマチスのため跛となって、読書執筆以外には何一つ道楽のない身の上となっておられたので、余財を傾けて書物を買われたのであるが、自分は決して「初版狂でも珍書狂でもない」と言われながらも、大変な美本好きであった。だから、あの「エヴリマンス・ライブラリー」の如きも、われわれは、どうもあの安っぽい装幀が気に入らず、何とか彼とかいって、少なからず軽蔑の色を示したものであったが、さすがにクラーク先生は、これの上製本――革表紙の分――を持っておられ「なるほど、これなら座右に置いても恥かしくない」などと、われわれを感心させたものである。例の有名なアメリカの本屋モシャアの特製本なども極めて大切にして、多数所蔵せられた。もっともわがクラーク先生もたえず借家難に悩まされ、次から次へと気にいらぬ家に居を移されたので、大正五年秋京大に就任後は、蔵書の大部分は大学の教授室に保管されていた。先日も何かにのった記事に先生の蔵書二万五千冊とあったが、実際はそれ以上あったのではないかと思う（続）。

詩経（二）「我徂東山」訳註

松枝茂夫

我徂東山　我れ東山に徂き、
慆慆不帰　慆慆として帰らず。
我来自東　我れ東より来たれば、
零雨其濛　零つる雨　其れ濛たり。
果臝之實　果臝の實は、
亦施于宇　亦た宇に施い、
伊威在室　伊威は室に在り、

蠨蛸在戸　蠨蛸は戸に在らん。
町畽鹿場　町畽は鹿の場となり、
熠燿宵行　熠燿は宵行くならん。
不可畏也　畏る可からざるなり、
伊可懐也　伊れ懐う可きなり。

東の国を征伐に出て行って、長い年月帰れなかった。やっとの思いで帰ってくるわたしを、雨はもうもうと降りこめる。

カラスウリの実は軒端に這っているだろうな。トコムシは家のなかを走りまわり、アシタカグモは戸口に網を張っているだろう。田のアゼは鹿の遊び場になり、夜には鬼火が飛んでいることだろう。しかしわたしは怖くない。それどころか懐かしさでいっぱいだ。

『砂の砦』の「沖の島」の推敲

金井　寅之助

『朝の旅人』では、第一聯は、「沖の島／沖の沖の島／その数八九　十二三／みなかげ青し／かしこにも人の住むてふ」である。初出の「素直」誌では、末行は「かしこにも人住むと見ゆ」とある由。後の『三好達治全詩集』では、「かしこにも人住むと見よ」と、逆に、初出に近づく。事実に沿はうとし、オ音の押韻にも惹かれたのかも知れない。しかし、ことごとしくて、「かしこにも人の住むてふ」の、余韻嫋々には及ばない。「沖の島」の繰返しを初めとする、視線の辿るにまかせた韻律も快く、自づと、情感は、住む人にまつはつて行く。愛憎に疲れはてた詩人が、捨てられたやうな島の人たちの、静かな、平和な営みを、思ひ、慕ふのである。「赤きポストやふりたらん」に、涙したことを覚えてゐる。達治には珍しい、推敲の失敗であらう。　（昭和五八・一二・六）

エチユード

小高根　太郎

公園の黄ばんだ芝生に枯葉が散りしき、泉はもうオパール色の水を噴きあげない。情念を燃しつくした老詩人は、ものうげにベンチにうずくまり、冬近い午後の日のぬくもりを背に受けている。かつては花やかな夢の白馬に乗り、宇宙のはてまで駆せつけて、生れ来る星の子供たちを眺めたのだが、今彼の脳髄は灰色の空虚だけ。そろそろ青い冷気が森蔭から忍びよる。束の間の小春の安息は間もなく過ぎ去るだろう。詩人よ、起って暖い灯のともる家に帰り、ルビー色の酒を一杯やって、浮世の憂さを忘れなさい。

痴人と医師と

浅野　晃

——おれをどうしようというのだ
——いけませんね　この世へ戻してくれといったのはあなたですよ
——そんなことおれがいつ云った
——あなたは一度あの世へいったんですよ
——思ひ出した　おれはチャルカを取りに帰ってきたんだ
チャルカはどうした　チャルカはどこへいった
あの老いぼれめ　死にゃがって
ガンヂのバカヤロー
（痴人倒れて泣く。医師扶け起して）

——あなたはアジアの星です。
あなたにいま行かれちゃ困るのです。
（背中から酸素ボンベをおろし痴人の口にむりやり吸入器をとりつける）
——これでよしと
（青年医師　昂然としてうたう）
アジアはその単純なる生活を毫も愧づるの要なし
アジアは時をむさぼり食ふ速度の快楽を知らざれば
ああおのが手もて織りし衣服におのが身をつつむものよ
これぞみづからの家に家居するもの
魂にその安住の場を供ふるもの
巡礼と行脚を旅ゆかしたるもの
われらこれを護りて戦ひ死なん

（旧作補訂）

ARS の証明

藤澤桓夫

こんな見事な馬を
あなたは見たことがあるか
爛々たる眼の輝き
躍動する四肢のリズミカルな光沢
各地の競馬場で
名馬と謳われたサラブレッドを
ずいぶんと見て来たけれど
生命の泉を飲み干して来たばかりのような
こんな素晴らしい馬に
めぐり邂ったのは初めてだ

もし翼が生えていたら
これこそ天馬
太陽めざして
驀地(まつしぐら)に翔(と)んで行ってしまったことだろう
ああ　あの馬にもう一度逢って見たい
―その名馬
　一体全体どうしました
　現在も無事にどこかにいるのですか
―現在はたしか
アメリカかどこかの大都会の画廊で
眼をいからせながら
脱走の機会を狙っている筈です
それは
ピカソの馬なのです

真実

野上吉郎

永遠と時間の切点に立っている独りのかたを見上げることが私には許されている。
このかたを見上げる限り、暗いまやかしの世界にも、その根源には真実のあることを知らされる。
このかたの真実に包まれて死ぬならば、死んでも屍に成り果てることはない。
真実の愛は物の世界の力をうち破っていのちに変えるのだ。
私も、このかたの真実に少しでも応えて、せめて晩年だけでも真実に生きるものとされたいと願う。

挽歌

福地邦樹

秋の終りの暖かい午前、弟は家を出て、近くの黄葉した雑木林の櫟（くぬぎ）の木にぶらさがって死んだ。三日後に発見された。出かける前に欝病の薬を多量に飲み、現場で酒を四合飲んで、犬のロープで縊（い）死したのである。それにしては顔も赤い欝血がなく涼やかに目をつぶり、舌を少し出して、この世にアカンベをして去るふうであった。

酒ばかり飲んで、妻に背かれ、二人の男の子に嫌われて、弟の居る場所が無くなってしまったのだ。甘えん坊で優しかった弟、子供の頃、母のあとをくっついてまわった弟、気儘でよくふくれた弟、母が死んだとき、おおおおと声をあげて泣いた弟。

焼き場について、炉の中に柩を入れた時、私は母のときには出なかったほど涙が出て止めどがなかった。何もしてやれなかった自分が無性にくやしくて嗚咽した。焼き場の空は雲一つなかった。千葉市の焼き場は重油で火力が強いので、一時間で焼けるのですと僧は言った。骨がくずれて嵩（かさ）が少なくなるので丁度よいのです、とも言った。

爽やかな朝

石山直一

その朝は爽やかだった
女は走って行って
墓が空虚(から)になっているのを視た
そして
御使の言葉をその胸にしかと受けとめた
「主は甦へり給へり」
遠い昔の異国の話である

しかし、その話から
いのちが溢れ出て
世界を覆(おお)い歴史を貫き
ある時はその檜舞台の上で
ある時はその舞台裏の片隅で
いつも、死を破る力として
休むことなく働き続けている

いまも、そのいのちの
息吹を受けるならば
戚蓼の日日を歎く老人の
孤独な魂にも
限りない未来が開け
行く手の墓から闇が砕け落ち
日毎の朝は爽やかになるだろう

今は昔の田植風景

牛尾　三千夫

一畝十四歩の田に、四十二頭の牛を入れて、田を鋤きしとふ。代掻き　あはれ

終戦後も　百頭の牛を田に入れし、囃子田ありき、石見の国に

哥大工、早乙女頭の幾人は、また亡くなりて、年は巡れり

芸謡に携りゐし人々も、齢尽くれば、亡き人の数

うぐいすと、声競べせし早乙女も、既にあらなくて、この里　さびし

年々の五月となれば思ひ出す。町田佳声と行きし日ありて

仕事田の　太鼓の音の　きこゆれば、寸刻も、家の中には、居られぬと言ふ

坪にされる　花早乙女の田姿は、下裳は着けず、赤き腰巻

赤名節で、田の神下しを　歌へりし、田中稲生は、何してありや

田唄にも　かなしき節の歌もあり。泉つや子の　さごろをきけば

花八つ手抄

原田　江南子

みくじ結ふ梅の蕾のややありぬ
草餅に番茶味よし石手寺
フラミンゴショー二度も見て日永なる
老木は切られ支える花の雲
都鳥ここまで来るか水ぬるむ
神木の雫ほとほと春の雨
足の冷えいたわる渡船菜種梅雨
繋がれしボート明るく日脚伸ぶ

尾長鳥裸木に群れ暖かし
大落日富士も梅花も霞の中
日当れば鸚鵡よく鳴き春隣り
「恩」と「怨」こもごも卒業謝恩会
花の下子らそれぞれの遊びあり
芽柳や江戸の名残りの濠と橋
春闘やストに馴れたる傘の列
養鰻の池連りて水温む
竹林を根よりゆるがす春一番
美濃は雨近江は晴れて春の湖
京の橋渡るや岸は花の宵
子雀が転がり沈む春の雪
地に捨てん悩み痛みや花の下

シュプール

川村欽吾

言葉を忘れ　樹氷たちは　歩哨にたっている
まひるの高原
ふりまかれた太陽の視線は
音もなく　ひろがり　いちめんに
微笑する。

真白いアフロディテの　腹部の

丘から　するどく
切りひらいて　すべり　降る
ひとすじの　シュプール　その傷痕に
うす黒い血が　さあっと　あふれる
透明な時間。

稜線の上に　張りつけられた
天からの　声のない歌　この
巨大な
青い旗。

光り

江頭彦造

傷ついた葦を折ることなく
ほのぐらい灯りを消すことなく

花々は　微笑む
みどり児たちの
初春の　叫びの　声

……ユーコン河の　白波　騰(た)ち
鮭　はふる
白熊

岸辺の　黯(くら)い
ghost town
野面(のづら)を　はしる
狼の　声

たえまなく　霧となって　上昇しつづける
Auroraの　ひろごり　ひろごる
妖(あや)しい　光り……

嫖緻(きりょう)よしの朝

伊達　温

えーいっ
白いあしが
芝生の緑の背中を蹴る

黒い胴が
黒く包みこもうとする
白い剣道着は

胸のあたりから
ふくらみ
はちきれそう

えーいっ
めの手と　ゆんでに
支えられ
握られた竹剣(しない)が
しなやかに空(くう)をきる
やあーっ
ひとこえを抱き
茶色の胴をはらう

素足の上
むすびおえ
ふたつにたばねる
繊々々のかみのけが
ながれるようにくろくひかる
嘉(よし)と
益(え)の眼が
ひた
ひた
ぴゅうっ
秋を見る

ブルーミントンのさくら

たかはし　しげおみ

コレハ　cherry, cherry blossom.
これ　やっぱり　さくら？
サクライロ　トイフノハ　コノ　アカ
bright red.　ピンク　デハナイノネ

なんとまあ　あかるい赤　まだかなしみを
知らない娘たちの頬のように

このひとつひとつが　さくらんぼになるという
しかし　ある日　あるあけがた　無数の

小鳥があらわれて　ひとしきり　はしゃぎまわったあと
まっ赤な　さくらんぼはあとかたもないという

さくらんぼも　食欲をそそるか
コレハ　サクラ　花咲町の　サクラ

伊吹山

岩崎昭弥

琵琶湖から眺めると
まろやかに大きくて優しい。

濃尾平野の長良川畔から見る佇いは、
尊厳で気高い。
四季、朝夕、それぞれの時に、
美しく化粧し、服も見事に着こなして
なまめかしく誘う。

「あゝ　一度だけでも登りたい。」

最初に、夜の夏山に挑む。と
七合目で、猛烈な雷雨に合い
頂上を極めることを諦めた。

「秋は絶対に征服しよう。」

決意とともに、慎重にその日を選んだ。
出発の足どりは軽いつもりだが、しきりに胸騒ぎがする。
天気は上々で、この秋晴れが嬉しい。
が、関ケ原まで来ると空があやしく曇り出した。

山にさしかかると時雨れだし、
やがて、氷雨となって、身体はびしょ濡れになる。
歯軋りしながら、再びひき返す。

冬は、白くたおやかで魅惑に満ちている。
……けれども近より難い。

春を待つ、日々の永さよ。

しかし確実に春はやって来た。
五月の風に乗って、また山に挑む。
「今度は征服できるかどうか？」
一瞬不安が胸をかすめるが、元気を出す。

不思議なほど、空が青い。
もう一息……
見れば、頂上が招き呼んでいる。
眼下に、湖が空の鏡となっている。
ひろい花畑の、無数の蕾がゆれる。
思わず、僕は身を投げ出す。

太陽が空で溶ける――「僕は此処で死にたい。」

春の樹木（ツワイク）

秦　海人訳

昭8年
7月27日
日記より

方々の樹木はどうして蒼い
空をその梢で塞いでいることだろう
このざわざわ鳴る緑の雪たち。
その間にまじるこの火花、この白いのは
暗がりからもう萌え出たあたらしい
花かしら、それとも星なのだろうか。

空に唇をいまつけているものこそ
あのさびしい冬の日の
蒼ざめていたものと本当に同じものなのだ
それをぼくらは幾度もあこがれて眺めたものだ。
その幹が春の近ずきを
示してはいないかと。

慰(や)る方もなく枯れて空(から)っぽの桟敷に
彼等はいつも立っていた、そしていま胸を
息ずきながらお世辞いう風の中で揺り動かしているものが
秋の日に涙のように蒼ざめた
黄色の葉を落していたものと
本当に同じもの、一つのものなのだ。

松

加藤和子

松は　百絃の琴
遠い大陸から海を渡って来た風が
　その琴をかなでる

大津皇子のお墓には
大きな松の木がそびえている
ある日　私はその幹にもたれ
太古のしらべを聞いた

松は　百絃の琴

冬のたそがれ
二上山のシルエットは
雄岳から雌岳へと走り下りる鹿たちに似た
　松の影を浮き立たせている

くも

花井タヅ子

アイスクリームの空箱を
車庫へ降りてゆく階段の
途中に置いていた
或日
それが必要になってとりにゆき
ふたをあけてみると
　小さなくも
　一ミリのくも
　たった一匹入っていた

どうしてこんなところに
あなたはすめるとおもっているの？
大丈夫なの？

でもやっぱりふたをして
また階段をあがって
ゆきました

或る季節

宇田良子

樹を伐る
古い樹を伐る
棲みついた精霊たちが
石組みの上に落ちる
血のあとがみえる

それから
家の冬がはじまる
骨を殺ぐ老人
長い橋を渡る娘
卦の枠で苦笑するおとこたち
人は階段を下りつづける

夜更け
眠れぬ闇をひきずる
精霊の子ども

今日
深いねむりを解き
歪んだ窓をあける
と
そこに
傷ついた切株に

萌え立つものを見る
それは小さい掌を振りながら
窓にむかって合図している

ひかり
季節の舞台ではずんでいる

春昼

藤野一雄

高曇りの空を写している湖
乳いろの湖を映している空
逆立ちしてみても同じの
大きな水盤の真ん中にいる誕生仏
小さいゆびさきに天心を指す
少年のころは何故か意識は鮮明だった

かげろふ水面に浮いている舟
舳先には妻が艫には夫のいる日常の水尾
相対する二人の間隔が平衡を保っている
もどかしい秩序を載せて漁舟はゆき
みづ湖もここら辺りでは凡庸な顔をしている
怠惰な傍観者にも砂のぬくみはあった

ちかごろ人々は
びわ湖の有用性について論議してをり
僕は　ひとときを
無用の湖を　愛しんでいたのだ

祈り

坂口允男

神は天に　ましませば
　やすらぎの気は
　　地に満ちぬ
吾はめざめて打ち震へ
　祈りの眼（まなこ）ひたすらに
　天頂の星　仰ぎたり

悪魔は闇に　いななけど
　吾は恐れず祈る時
雷鳴高くとどろくや
　光茫長く　尾をひきて
　青き光は　空に消ゆ

祈りの果の悲しさに
　涙流るる　吾なれど
　　心はやすく
　　伏し拝む

ジブラルタル夜航

石濱恒夫

急速に海は暮れて心も暮れて
スペイン煙草のネグリタを吹かせながら
胸奥のまっ暗らな湖のひろがりに
張りめぐらせた強靱なピアノ線が
涙の粒のしたたりに音楽を奏ではじめて
海峡の果てに細く白い三日月と一群の星屑
ジブラルタルよヘラクレスの柱よ
まだ見ぬ地中海から溢れ寄せる波浪と
季節の風に逆らってしぼった帆を孕ませ
アフリカの山脈とイベリヤの大地の起伏
点滅し回転するいくつもの灯台の光茫
潮に乗って次々と現れる巨船の警告も無視
タックを重ね押し流されしたたかに濡れ
ここは往古のフェニキヤ人たちの地の終り
航行違反は十二分に承知しているのだが
愚かにもこんな地球上の一点の夜を漂い
満足しきっている誰れ知るまいに

一九八五・二・二

わたしの言葉

田中克己

むかし，この雑誌で，読者から詩稿を募集するから，君たちが選者になれと，堀辰雄さんから，神保光太郎，津村信夫，わたしが言われたが，津村は死に，神保は音沙汰なく，杉山平一君に頼んだら，ことわられた。止むを得ず73歳（数え年74歳）のわたしが，編集選者になる。もとより好き嫌いの多い男だから，選に公正を欠くかもしれないが，これからは，創作の詩，ならびに文章をどしどし寄せてもらいたい。ただし，4回以上の会費（2，000円以上）を出してくれなければ，のせられない。当分，2段組にするが，これも財政上止むを得ないことを，了解してもらいたい。いづれ適当な選者がみつかると思う。春，夏（8月号），秋（10月号），冬（12月）とで4回出すつもりだから，安心して募集に応じてもらいたい。400部刷る。

創刊号は植村清二先生はじめ多数の玉稿を賜わり好評忽ち売売り切れたので第2号（春季号）は部数をふやした。

堀多恵子夫人や会員の投稿も得た。3号は更に良き同人と会員の投稿を掲載する。尊敬する大先輩（小説家）藤澤桓夫氏の詩は珍らしいだろう。自画自讃ではないが主宰としてこんな嬉しいことはない。原田江南子は高等学校以来の古いつきあいで，故保田与重郎（『四季』同人）と私の編集したプリント雑誌『炫火』（かぎろひ：故哲学者松下武雄の命名）12「めぐはる」のペンネームで書いてくれていた。なつかしい限りである。

（同人規定）

1．同人は田中が『四季』にふさわしい作家を選び，毎号のせることとする。

1．老大家以外は同人費として毎刊2,500円（送料共）を納めること。

1．なるべく常用漢字，常用かなづかいを用いること。（短歌・俳句・川柳・引用文等は別にする）

1．当雑誌を各方面に広く配布してもらい，売金を刊行元に送金（郵便小為替）で送ってもらいたい。（送料引）

1．同人に適当な人があれば紹介してほしい。

（会員規定）

○ 会員は男女職業年令を問わない。
旧『四季』を閲覧し，堀辰雄氏を愛した経験のあるものに限る。

○ なるべく常用漢字，常用かなづかいを用い，創作であること（2ページ分が望ましい）。

○ 会員費として4ケ月分2,000円（送料180円）を振替東京8－132924四季社まで納入してほしい。

○ 同好者を誘ってもらいたい。

美しさへのマイウェイ

双美人（そうびじん）

明治36年
双美人マークのクラブ化粧品が
創業いたしました。
以来、80年にわたり
皆さまに愛されてきた
クラブ化粧品が
動植物エキスを配合して
つくりあげたフルベール。
今、双美人マークは
フルベール化粧品の
シンボルマークです。

フルベール化粧品®
本社　大阪市西区西本町2-6-11
〒550 電話(06)543-0077

同　人　名　簿

（順不同）

＊植村清二	176	練馬区桜台６－８－５
岩崎昭弥	502	岐阜市近島２３２
＊石山直一	559	大阪市住之江区住之江１－３－１０
＊牛尾三千夫	694	島根県邑智郡桜江町市山４７４
＊小高根太郎	156	世田谷区桜１－６３－６
高橋しげおみ	632	天理市三島町１００
福地邦樹	578	東大阪市新庄２４１－１７
江頭彦造	167	杉並区下井草２－１６－１２
川村欽吾	036	弘前市豊原２－３－３５
＊小杉茂樹	421-05	静岡県相良町波津７６２－２
伊達温	565	吹田市尺谷２４－５
＊野田又夫	602	京都市左京区松ケ崎三反町５
坂口允夫	630	奈良市高畑大道町１２３２
金井寅之助	670	姫路市野里慶雲前町７０７
石濱恒夫	558	大阪市住吉区墨江２－５－６
＊松枝茂夫	167	杉並区本天沼２－３７－２１
山住正己	166	杉並区阿佐谷南１－３８－２
＊藤澤桓夫	558	大阪市住吉区上住吉２－１２－４
秦海人	181	三鷹市下連雀４－５－１３　小林方
＊高田瑞穂	157	世田谷区成城２－４－２０
田井中弘	520-03	大津市伊香立下在地町９１４
＊矢野峰人	158	世田谷区深沢２－１４－１７
＊浅野晃	151	渋谷区本町３－３２－１－１００４

（＊は名誉同人）

季刊　四　季　第二号

発行　四季社

〒166　東京都杉並区阿佐谷南１－４０－８
電話　０３（３１４）２７８３
田中克己　方